

はじめに

日本の平和教育は、多くの実践者と研究者の努力により膨大な成果を生み出してきた。学校教育の実践を中心に、市民の平和学習や幼児教育、平和博物館など多様な領域で豊かに展開してきた。また、9・11以降、従来の平和教育運動に関わりを持っていなかった人びとの間でも平和教育への課題意識が高まっている。さらに、これまで平和教育に意識的に取り組んできた人々の間で、戦争の問題だけでなく、差別・人権・開発・環境など幅広い内容を平和教育の課題として取り入れる必要性が叫ばれている。こうして、平和教育は、平和に関心ある広範な人々の間で、戦争の問題のみならず広く暴力一般を課題とする豊かなものとして展開している。

今日の平和教育の到達点は、このようにまとめることができるだろう。しかし、そこには次のような問題がはらまれている。第1に、近年の日本と世界の平和をめぐる情勢を考えると、これまでの平和教育が戦争のない世の中を目指して展開してきたにもかかわらず、戦争を克服し紛争を非暴力的に解決する展望と確信を育てることに成功していなかったのではないかという点。第2に、平和教育の射程を広げたことで一見豊かな意味を持つようになった新しい平和教育の諸課題は、実は教育そのものの諸課題と一致しており、平和教育が教育一般と同義になってしまったという点。

これら2つの問題は、「平和教育の存在意義は何か」という根源的な問いを浮かび上がらせることとなった。いま、これまでの平和教育も新しい平和教育も、ともに重要な岐路に直面しており、今日の現実に対応できる平和教育をつくりだす必要に迫られているのである。そのためには、さしあたり次の点にいかに応答するかという地点から始める必要があるだろう。①従来の平和教育が説得力を失い始めたのは90年代半ば以降だと考えられるが、では90年代にどういう時代の変化が起こったのか、②その変化に対して求められているものは何

だったのか、③これまでの平和教育が変化に対応しきれていない原因は何なのか、④これからの平和教育に求められていることは何なのか。以上の問いに答えられたときに、これまでの平和教育の蓄積を批判的・発展的に継承して、だれもが求めている問いに答えられ、今日の危機を突破し得る平和教育の構築に進むことができるのではないか。

本書は、以上の現状認識と課題意識にたつて、現在までに流布している平和教育論や平和教育実践では対応しきれていない課題にこたえられる平和教育の理論と実践を示すことを目指している。これまでの平和教育の膨大な蓄積を継承しつつ、新たな時代状況に的確に対応できる平和教育の方向性と実践を示すことが本書のねらいであり、その延長線上には、「平和教育学」という新たな研究・実践領域が立ち上がってくる。

第I部は、日本の平和教育の歴史を通観しつつ、上述の現状認識と課題意識を明確にすることを通して、平和教育の全体構造を明らかにする総論。第II部は、学校教育の各教科・領域から社会教育、平和博物館、幼児教育にわたる各論。第III部は、日本の平和教育の特色を明確化するための、欧米、韓国、イスラエル・パレスチナの平和教育の概論。以上3部構成を基本に、多くの実践者の試みをコラムとして収録した。編者としては、本書が、これからの平和教育の指針として読まれ、多様な議論の素材となることを切に願う。

2011年9月

竹内 久顕